

古典の日

十五 最上川



松尾芭蕉

もがみ川乗らんと、大石田と云ふところに日和を待。爰に古き誹諧のたね落こぼれて、わすれぬ花のむかしをしたひ、芦角一声の心をやハラげ、此道にさぐりあしして、新古ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなれば」と、わりなき一卷を残しぬ。

奥の細道

このたびの風流爰にいたれり。
最上川はみちのくより出て、山形を水上とす。こてん・はやぶさなど云、おそろしき難所。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。左右山おほひ、茂ミの中に船を下す。是に稲つミたるをや、いなぶねとハ云ならし。白糸の滝は青葉の隙に落ちて、仙人堂岸に臨て立。水みなぎつて、舟あやうし。



最上川の古口の船着跡付近 (山形県最上郡戸沢村)

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

さみだれを
あつめて早し最上川

雄渾の最上川詩篇

芭蕉と曾良は五月二十八日(陽曆七月十四日)朝、山寺から北に引き返して最上川畔の大石田に出た。酒田までの最上川水運の拠点として栄えた町である。芭蕉を待ちかまえていたのが、高野一榮と高桑川水。二人とも水運管理や船宿を営む町の有力者でかつ俳人。すでに尾花沢の清風庵で芭蕉に会い、彼の来訪をうたつたらしい。芭蕉の述べるとおり、この辺陞の地にもしばしば俳諧の趣味が伝わり、芦笛を吹いてみずからなごさめるような素朴な風流の心(芦角一声の心)がつかわれていた。だが当時は新古の俳風の混乱期、大石田の俳人たちは熱心に江戸の新詩人に指導を求めたのである。

その熱意にほだされて歌仙一卷を巻いたと芭蕉は言うが、師匠の「五月雨を集めて涼し」の発句につけて一榮が「岸にほたるを撃つ舟杭」と応じたり、なかなか悪くない。今回の旅の「風流爰にいたれり」とは芭蕉の好意と共感の言葉であつたらう。

新庄でも地元俳人たちと歌仙を楽しんだ上で、六月三日晴天の日、芭蕉らは六キロ西の本合海で最上川下りの船に乗った。「左右山おほふ」絶景のなかを、狩川まで水みなぎつて舟あやうしの経験の後に、「五月雨をあつめて早し最上川」の一句。——なんと力に満ちた極小の詩篇!

さきの「涼し」を「早し」に改めたからだけではない。動詞「集めて」の一語による地形の把握が「こと」なのだ。事実、最上川は吾妻山塊を源として北上し、西側の飯豊・朝日・月山の大連峯、また東側に連なる奥羽山脈、それらの山腹に降る雨をみな集め、やがて大きく西に折れて庄内領から日本海へと注ぐ。出羽国全域の雨を「集めて」急ぐ大河なのである。

以後、最上川を詠んで芭蕉のこの雄渾に迫りえた詩歌はあるか。それは大石田に疎開中の斎藤茂吉の敗戦の痛恨のなから歌数首ばかりだらう。「白き山」の四方の山嶺々々として居りながら最上川に降る三月のあめ

芳賀徹さんとたずねる
おくのほそ道



遠い過去が未来へと続く

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、今、連載さ

古典と私

れている俳人芭蕉が綴った「奥の細道」冒頭の一文である。

昨年暮れ、この冒頭の一文を、63歳から「書



京都銀行頭取 柏原康夫さん

を教わっている日比野光鳳先生の指導をいただき、作品へと仕上げた。

一昨年の源氏物語十年紀を記念した「源氏物語桐壺」の一節に続く私なりの大作で、ほっとして



鴨長明庵跡にある方丈石の碑 (京都市伏見区日野)

文学ウォーク

京都市伏見区日野の法界寺より、東へ山路をたどること約1キロ、道をさえぎるように張り出した大岩が方丈石です。岩の上に1772年に建てられた「方丈石」の石碑があり、その前のささやかな空き地は鴨長明が1212年に随筆「方丈記」を著した終の栖跡です。

長明ゆかりの下鴨神社の摂社・河合神社には、この1丈(約3尺)四方という質素な庵「方丈」が復元されています。長明は下鴨神社の社家に生まれながら、河合神社の禰宜になることもできず、彼の和歌や管弦の才を惜しんだ後鳥羽上皇の特別の配慮も断り、50歳で大原の地へ隠棲、後にここへ移りました。彼のそれまでの人生は、安元の大

治承の台風、福原遷都、養和の大飢饉、それに元暦の大地震と天変地異が続き、京の町には死人が路頭にあふれ異臭放つといった無常の世相が続いていました。

長明は喧騒の俗世を離れ、人間関係のわずらわしさを絶ち、すべてを捨ててこの山中に独居します。四季の花鳥を友とし、松風や谷の水音に合わせて琴を弾き、西の入日に阿弥陀の来迎を願い、一期の楽しみをうたつた寝に求めます。晩年至福のひとときを綴った彼の文章に、本当の幸せとは何かを教えられます。(NPO法人・都草 林 寛治)

喧騒の俗世離れ 山中に独居

親しむ

新年を迎えている。ちなみに、芭蕉最後の句は「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」。人間とは何かを問いつけた彼の人生への反省が、今日の私たちの心を打つ。

万葉集に始まる日本が誇る古典の数々、そこには、生きる喜びや悲しみ、人生の無常が綴られ、めぐる季節と自然を歌い、切ない恋が語られる。それは、何百年あっても切ないものと思ふ。

さかも色褪せることなく、今も読む人の心と暮らしの中に、深い陰影や彩りを投げかける。遠い過去が今につながる。そして未来へと続く。人々の歴史が続く限り、いつの時代にも古典は、甦り、私たちに時に勇気づけ、時に戒め、時に優しく包み込む。素晴らしき千年の都、京都とともに、これからも古典を愛し続けていきた

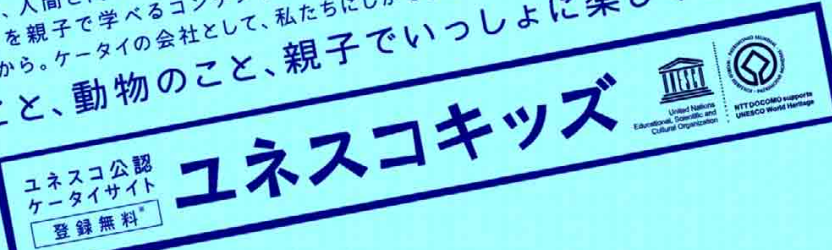
古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は1月1日を「古典の日」と定めた。

NTT docomo

ゴリラの鼻うた、聞いたことありますか?



気分がいいと歌ってしまうなんて、人間と同じですね。ユネスコキッズには、動物たちの鳴き声や神秘的な自然の動画など、世界自然遺産のことを親子で学べるコンテンツがいっぱいあります。自然を好きになった子どもは、きっと自然を壊さない大人になるから。ケータイの会社として、私たちにしかできないことをつづけていこうと思います。世界自然遺産のこと、動物のこと、親子でいっしょに楽しく学ぼう。



ひとりひとりに、こたえを。ドコモ